

# ゾラの『労働』における 労働からの解放のユートピア

彦江智弘

## 1. 『労働』のアクチュアリティ

『労働』の受容についてアンリ・ミットランはその浩瀚なゾラの伝記において、当時の著名な批評家たちの評価を概観した後に次のように書いている。「読者の方はといえば、フランスでも海外でも、『ルルド』から『労働』にいたる一連の小説が次から次へと出版されることに息切れしていた。しかも読者はそれらの作品に、哲学的な言説の水準が劇的に高くなりはしたものの、『ルーゴン=マッカール叢書』にはあった均整もドラマの強度も文体も認めることはできなかった。そしてゾラの凋落がささやかれ始めた<sup>1)</sup>。これは現代においてもいわゆる「第三のゾラ」——『ルーゴン=マッカール叢書』以前、『ルーゴン=マッカール叢書』期に続く、『三都市』と『四福音書』からなる作品群——をめぐる一般の読者だけでなく研究者の間でも広く共有された見方であろう。2020年現在のフランスで、『四福音書』の作品群が他の作品とは異なり大手出版社のカタログには加えられていないという事実が、この点に関して雄弁である<sup>2)</sup>。あるいは『ルーゴン=マッカール叢書』に比してこれらの作品に関する研究が実に少ないことも挙げるのが可能だろう。確かに一見すると「第三のゾラ」の作品群は『ルーゴン=マッカール叢書』においてゾラが確立した作品構築のシステムに則っているように見えなくもない。だがやはり『ルーゴン=マッカール叢書』にあった冷徹な観察や分析、あるいは作品構成や文体の緻密さ

はここでは後退していると言わざるをえないように思われる。この点を当時の読者もすでに感じ取っていたわけである<sup>3</sup>。

このようないわば詩学的側面での後退が、先のミットランの引用にもあるとおり、ある意味「哲学的」なあるいはイデオロギー的な言説の上昇を伴っているということが、「第三のゾラ」をめぐるもうひとつの問題として挙げられるだろう。「第三のゾラ」においては、ゾラは観察と実験に踏みとどまることをせず、むしろ積極的に社会的なヴィジョンを提示することを厭わないように見える。しかもそのヴィジョンは——とりわけユートピア建設が物語られる『労働』において——いささか楽観的というだけでなく、かえって様々な問題を喚起するような性質のものである。このことを正面から俎上に載せたのがほかならぬアンリ・ミットランの一連の論考であることは周知の通りである。例えば、ミットランは「反抗とユートピア——『ジェルミナル』から『労働』へ」において次のように書いている。「『ジェルミナル』においてプロレタリアの悲惨と反抗が表現されていた黙示録的イメージは、『労働』では友愛と繁栄の神話によって取って代わられた。この神話は、通常私たちがゾラの名前に結びつけることをしない社会的・政治的思潮の際にまで踏み込んでいる<sup>4</sup>」。先ほども述べたとおり、この変転が詩学的側面での後退と共にイデオロギー的な言説の上昇として際立つという結果を招いているのである<sup>5</sup>。

このように『三都市』と『四福音書』期の「第三のゾラ」、とりわけ『労働』はある意味マージナルな位置に置かれているわけだが、むろんだからといってこれらの作品群には価値がないと直ちに断じることはできないだろう。実際、アンリ・ミットランは先の引用に続けて次のように述べている。「『ジェルミナル』から『労働』への変転」を探求することは、19世紀末のフランスのイデオロギー構造の認識にとって実り豊かなものになるだろう。1930年から1945年の間のある種の政治的言語の理解、またおそらくは1975年以降の政治的言語の理解についても同様である<sup>6</sup>」。ここでミットランが「1930年から1945年の間のある種の政治的言語」と言っているのは、『労働』のイデオロギーがヴィシー政権のそれと通底するものであるという見立てがあるからだ<sup>7</sup>。これは端的に言って、作品そのものの評価はさておき、作品がその特異性においてある種の文脈におい

て価値を持つということであろう。しかもミットランは『労働』が同時代の「政治的言語の理解」に資するアクチュアリティを持ちうるということをも示唆している。ところでそれは一体どのようなアクチュアリティなのだろうか。あるいは21世紀の現在においても、1902年に発表されたゾラのこの小説は何らかのアクチュアリティを発揮しうるのだろうか？

例えば、以下は近年喧しく議論されている人口知能（AI）に関する本の一節である。

それでは、未来に訪れるであろう経済「純粹機械化経済」にとってBI [=ベーシック・インカム] はどのような意味を持つのでしょうか？ インターネット掲示板2ちゃんねるには、

遠い未来には、機械に労働させて、人間はBIで暮らすようになるのかな

という書き込みがありました。<sup>8</sup>

AIについては、2045年に人間の知能を超える技術的特異点、いわゆるシンギュラリティに到達するという予測や、そうでなくてもAIの発達、とりわけ汎用AIが登場することで数多の職が消滅するという悲観的観測が取り沙汰されることが多い。しかしその一方で、上の引用にあるように、AIの導入により拡大した生産性がベーシック・インカムという形で還元されることに期待をかける楽観論も存在しており、AIをめぐる議論の振幅は大きい上に様々な付随するテーマ——ここではベーシック・インカム——と絡み合いある意味混沌としている。実際、前者はAIが人間を凌駕し、人間から労働を奪うことに最大限の危惧を示し、後者はいわば労働からの解放のチャンスを見ているとすることができる。このような議論に対してゾラの『労働』は何らかの返すこたえを持っているのではないだろうか。例えば、『労働』において最終的に実現したユートピアにおける労働のあり方は次のように描写されている。

そして生産と消費の二重の協同組合が勝利の仕上げとなった。労働はこの広大な計画、人類の団結の実行に立脚することで組織し直され新しい社会を出現させた。人々は4時間しか働かず、しかも自由に選んだ仕事であり、労働が魅力的なものであり続けるためにそれも絶えず変えることができた […]。これらの職は道理にかなったやりかたで連鎖しており、それはいわば新しい社会秩序の構造そのものだった。それは社会を調整する労働であり、生の唯一の法則だった。かつての敵であった機械は従順な奴隷として多大な労苦を要する仕事を担っていた。市民は40歳で労働者としての恩義を社会に返し終わり、後は個人の楽しみのために働くだけだった。<sup>9</sup>

ここでは実際に「機械に労働させて」いる社会が出来ており、人間はと言えば、わずか「4時間しか働か」ない。もちろん1日4時間であろうから、労働日が週5日だとして週20時間労働という驚くべき労働時間の短縮が実現している。しかも40歳以降はもはや生活のためではなく自分の愉しみのために働くにすぎない。その一方で、機械は「従順な奴隷」の立場におかれている。『労働』に登場するユートピアであるボークレールにおいては貨幣が「無用で虚構の価値<sup>10</sup>」とされ廃止されているため、ベーシック・インカムのような仕組みが存在するとは思えないが、ゾラの『労働』ではインターネット上の巨大掲示板に書き付けられているような労働からの解放の夢が実現しているのではないか。その一方で、これは一種のパラドックスであるように思われる。なぜなら『労働』は労働賛美の書でもあるからだ。つまり、『労働』においてはそのタイトルを裏切るかのように労働からの解放が問題になっているのではないだろうか。このようなパラドックスはどのような理路によって成り立っているのか。本稿ではこのような問いに答えるために、以下において19世紀的労働観の成立事情を参照しながらゾラのこのユートピア小説を検討する。

## 2. 第2次産業革命とゾラ

まずゾラの『労働』が背景とするのがいわゆる第2次産業革命であるこ

とに注意を促しておきたい。第4次産業革命といわれるAI開発の進展は、たんに高度に発達した知的情報処理システムが登場したという以上の新しい社会構造の変動を引き起こす潜在性を秘めているわけだが、『労働』においても同じことが起こっているのではないだろうか。実際、ゾラの『労働』において労働からの解放を可能にしているのは技術革新にほかならない。それは上の引用に見られるようなたんなる「機械」ということではなく、より具体的には蒸気機関に代わる電力あるいは電気技術のイノベーションである。「ジョルダンの考えるところでは、新しい都市に恵みの電気を惜しみなく好きにだけ […] 与えることになる日こそ彼の作品が完成する時だった<sup>11</sup>」。この「恵みの電気」を動力とする機械が従来の人間による労働に取って代わり、工場の生産性を著しく向上させることはいうまでもないだろう。さらにこの引用によれば、電気が都市の生活全体を覆い尽くすことが理想都市の完成として目指されているわけである<sup>12</sup>。『労働』は明確な歴史性が希薄であり、そればかりが後半になるにつれ、とりわけユートピアが成立する段になるとたんに時間は曖昧になる。それでもこの作品は時代の徴をとどめており、ほかならぬ電力技術への期待こそがそれである<sup>13</sup>。実際、ゾラが作家活動を行った第3共和政の前期は電気技術が飛躍的に発展した時期であり、それはおおよそ1870年代から第1次世界大戦までとされる第2次産業革命の時代と重なるものである。

この電気技術への期待が集約された出来事として1900年のパリ万国博覧会がある。この博覧会は前回のパリ万博を上回る5000万人もの来場者を集めたが、よく知られるように、その夥しい来場者のなかに『労働』執筆中のゾラの姿もあった<sup>14</sup>。1889年のパリ万博では鉄とガラスが中心的役割を演じたわけだが、博覧会の目玉が電気宮と機械館であったことから分かる通り、1900年の万博では電気と機械が主導的役割をはたした。この電気宮と機械館でゾラが見聞きしたものが、『労働』のテキストの細部にインスピレーションを与えたことは想像に難くないが、この博覧会自体の方向性自体にゾラの『労働』と共振するものがあつたのではない。この万博の位置づけについて、ティエリ・パコは次のように述べている。「1900年のパリ万博は過ぎ去りつつある世紀——溶鉱炉と蒸気機関で自信に充ち満ちた栄光の19世紀！——を総括すると同時に、諸国民の「連

帯」と「平和」と「友愛」を背景とする20世紀の希望を示さなければならなかった<sup>15</sup>。つまり1900年の万国博覧会は、たんに19世紀の技術革新の総括というだけでなく、ましてや世紀の変わり目における技術革新の水準を示すためだけのものではなく、来たるべき世紀が夢見るテクノロジーの進歩に先導された社会的変革の兆しを感じ取る場でもあったのではないだろうか。

実際、第1次産業革命がたんなる蒸気機関の発明による産業構造の転換だけでなく大きな社会変動を孕むことになったのと同じように、あるいは現在私たちが経験しつつある第4次産業革命においてもやはり情報処理技術の飛躍的な発展が技術の問題を超えて社会構造全体に変革を迫ると同じように、第2次産業革命をもたらした電気あるいは電力技術も重工業を成立させるだけでなく、良くも悪くもこれに付随する社会的インパクトを有していた。そしてゾラはとりわけ『労働』においてこのインパクトを正面から積極的に受け止めたと考えられるはずだ。ゾラにおいてはそもそも機械技術自体が作品中（例えば『獣人』）で主題化されるだけでなく、隠喩として他のテーマに作用するということがある。知られるとおり、この点については『小説家と機械』におけるジャック・ノワレの詳細な研究が存在している。ノワレによれば、「普遍的機械主義が完成にいたるには、最後の機械の働きを制御することがまだ残っている。歴史という機械のように、また人間という機械のように、社会という機械もまたその機能不全に打ち勝たなければならない<sup>16</sup>」。ノワレがここで「普遍的機械主義」というように、ゾラのテキストには、「機械」を起点に人間の身体や歴史、あるいは社会を捉える視座が存在している。このような視座は主に比喩のレベルで作動するものだが、「第三のゾラ」期の『パリ』や『労働』のようなテキストにおいては、これが実質化し機械が社会や歴史に実際に作用を及ぼしていく様が物語られることになる。この物語において目指されるのはむしろ「機能不全」の解消である。ノワレによれば、「こうして『労働』は階級間の和解と世界規模の友愛をめぐる福音書というだけでなく、まずもって労働者と道具との和解の寓話として立ち現れるはずであり、この和解こそがあらゆる社会変革の第一条件なのである<sup>17</sup>」。この社会的「機能不全」の解消をもたらすものこそが、「恵みの電気」による

新しい機械技術に他ならない。

### 3. 19世紀における労働の三つの契機

ゾラによる第2次産業革命の物語に第4次産業革命を生きる私たちの現在に重なるものがあるとして、それはたんに新しい技術革新がこれら二つの時代において喫緊の課題となっているというだけではない。ゾラの『労働』が描き出す技術革新は、重工業の成立によって産業構造が大きく転換するというのみならず、そのような転換を超えて労働自体からの解放という主題を孕むものであり、これが現在のAIへのある種の期待と通じるものであることはすでに見たとおりである。それではゾラの『労働』における労働、あるいは労働からの解放をいかに捉えればよいのか<sup>18</sup>。ここでは政治哲学の観点から労働の社会的位置づけの歴史の変遷を整理したドミニク・メーダの議論を参考に、ゾラの『労働』を19世紀の労働観が織りなす問題系に置き直すことを試みてみたい。

まず前提として、19世紀以前、労働にはけっして高い地位は与えられていなかった。とりわけギリシャ時代にあっては、言うまでもなく労働は社会全体で尊ぶような価値を構成してはいなかった。メーダによれば、「労働は下劣な仕事と見なされており、まったく評価されていない。ギリシア時代はそういうものとして、他の活動の発展の名において労働が賞賛されない社会の、一種の理念的な型を表している<sup>19</sup>」。そればかりか、ギリシア時代にはそもそも労働 (le travail) は存在してさえいなかった。「ギリシアには職業 [des métiers]、活動 [des activités]、役目 [des tâches] は見出されるものの、「労働 [le travail]」は見つかりようもなかった。その一方で、活動は極めて雑多なカテゴリーに篩い分けられており、労働を単一の機能と考えることなど到底無理だった<sup>20</sup>」。つまり、個々の雑多な活動こそあれ、それらは通常私たちが考える、抽象化可能な労働なるものとして認識されることはなかった。労働が雑多な活動から抽象化され、それをもとに人間の活動、とりわけ経済現象が捉え返されるようになるには18世紀のアダム・スミスを待たなければならない。その一方で、18世紀においても労働は未だ否定的なニュアンスを帯びた人間の活動であること

に変わりはなかった。これが劇的な変化を遂げるのが19世紀である。この劇的な変化をメーダは次の三つの契機として整理している。すなわち、「労働の賛美、現実の労働の批判、労働のユートピア図式の確立<sup>21</sup>」である。

メーダによるこの三つの契機が、一つのナラティブを構成していることは容易に見て取れるのではないだろうか。つまり、労働は賛美されるものであるにも関わらず、現実の労働において貶められている。そこで労働がほんとうに開花するための根源的な変革、あるいはユートピアを実現しなければならない。このようなナラティブがマルクスやユートピア的社会主義者だけでなく様々な社会思想家に見出されるというのがメーダの見立てである。『労働』の読者であれば、このようなナラティブがそのままゾラのテキストの構成原理となっていることに直ちに思い至るであろう。ユートピア都市の建設を物語る『労働』は、テキストの前半と後半が対照をなす構成をとっており、労働者が虐げられ搾取される労働の悲惨の場であるアビーム製鉄所を中心とする街が、主人公であるリュックと彼の盟友であるエンジニアのジョルダンの弛まぬ努力により、作品の後半において、ユートピア都市に生まれ変わる。そこではもはや労働は人間を悲惨に留めおく軛ではなく、人間性を十全に発揮しうる活動として開花する。このように要約される『労働』のナラティブを純化すれば、そこに現れるのはまさしく「労働の賛美、現実の労働の批判、労働のユートピア図式の確立」以外の何ものでもない。けれどもこれは驚くべきことではない。メーダによれば、19世紀全体がこのような三つの契機からなる労働観を多かれ少なかれ共有していたのである。

#### 4. 『労働』における労働表象の転回

ここではとりわけ「労働の賛美」に注目してみたい。アダム・スミスによって労働が抽象化可能なものとして取り出されたわけだが、先にふれたとおり、18世紀においては労働には未だ積極的な意味は与えられていなかった。メーダによれば、このような労働表象に意味論的転回をもたらした新たな価値付けを行ったのがヘーゲルである。ヘーゲル哲学が精神の自己認識の運動として歴史を描き出すのはよく知られているが、精神は自己認

識を高めるために外的世界に働きかける。ヘーゲルにとってはまさしくこの外的世界への働きかけこそが労働である。「ヘーゲルにとって労働は、それを通じて《精神》が自己を認識するために外的与件と対立し、自分の潜勢力を明るみに出さなければならないためにいわば外的障害を人為的に作り出すような、精神的活動なのである<sup>22</sup>」。つまり精神とは自己認識を高めるために外的世界を作り変えこれを我有化していく運動にほかならない。だとすれば外的世界への働きかけ、すなわち労働は人間存在に内在する本質だということになるだろう。メーダによれば、このような労働表象の意味論的転回はフランスにおいても観察されるものだ。「フランスでは爾後、労働は幸福へといたるために人間が有する手段として現れることになる。勤労 [= 産業 *industrie*] の概念と共に、労働賛美のフランス的言説はアレクサンドル・ド・ラポルドやサン＝シモン<sup>23</sup>の筆によって発展した<sup>23</sup>」。このように人類の幸福の追求の基盤に労働が据えられるとき、人間の労働を拡大する契機となる技術の進歩への熱狂が生まれる。いささか長い引用になるが、メーダの『労働社会の終焉』から以下の一節を引用しておきたい。

フランスでは何よりも、人間が自由に使えるようになった技術の驚異的な力に魅せられた政治家やテクノクラートの意見によって、[機械的労働観ではなく世界の物理的様相を変える] この力学的労働観が表現されていた。現実の労働条件が悲惨であった時代に労働を賛美することは、一見するととても奇妙に思われるかもしれないが、このような労働の賛美は全く説明のつくことだ。実際、哲学者や理論家たちは、<sup>インダストリ</sup>勤労 [産業] によって開かれ、加速しているように見えた歴史の運動 [...] がもたらした驚異的な発展力に感動して、各人の自由と、物質的充足へと向かいつつある勝ち誇った人類の力とを同時に表現しているように思われる人間活動を、賞賛したと考えられる<sup>24</sup>。

このような「技術の驚異的な力」の魅惑に裏打ちされた「労働の賛美」はゾラの『労働』にも容易に見出すことが可能なものだ。例えばリュック

は、マルル神父との会話において次のように言い放つ。「いえ、いつかこの大地に神の王国は実現するのです。前進する人類のあらゆる努力が、あらゆる進歩が、そしてあらゆる科学がこの未来の都市へと向かうのです<sup>25</sup>」。このようにリュックにおいて、勤労＝産業（「人類のあらゆる努力」）と科学技術の進歩は不可分のものとして、「各人の自由と、物質的充足」が実現するユートピア都市の礎となる。ここでそもそもリュックやジョルダンがエンジニアだったことを想起しておきたい。しかも彼らはたんなる技術開発だけでなくその社会実装をマネジメントするという意味で一種のテクノクラートとしても振る舞う<sup>26</sup>。こう考えると、リュックやジョルダンを19世紀を通じて「労働賛美のフランス的言説」を支えてきたテクノクラートの列に加えてもあながち間違っていないだろう<sup>27</sup>。

このようにゾラの『労働』をメーダが分析する「労働賛美のフランス的言説」の延長で捉えることができるとして、ゾラが際立つのは労働を人間の本質と捉える意味論的転回を正当化する際の理路である。先ほど見たとおり、ヘーゲル哲学においては、それまで積極的な意味が付与されていなかった労働を精神の自己運動という文脈に置き直すことでこれを人間の本質にまで高めていた。またフランスにおいても、より世俗的な仕方で、幸福へと至る手段と見なされるようになっていた。いずれも目的論的ニュアンスを帯びていることに注意しておきたい。ヘーゲル哲学における精神の自己運動もいわゆる絶対精神にいたる過程として捉えられており、決して無軌道なものではない。これに対して、いかにして労働はゾラにおいて人間の本質として措定されているのだろうか。もちろん幸福の実現のために勤労が積極的に評価されるということは否定しようもない。このような言説は『労働』の至るところに見出すことができる。例えば、ゾラは作品の前半においてすでに集産主義者であるボネールに次のように言わせている。「何もしないなんて、だめだ、だめだ！ それは死ぬようなものだ、ボネールは繰り返した。誰もが働かなくてはならない。そうすれば幸福が勝ち取られ、不当な悲惨もついに打ち倒される…<sup>28</sup>」。『労働』においても、このように労働が幸福にいたる手段であることが強調されるのだが、この引用の前半部分にも注目すべき点がある。それは労働が生という次元に結びつけられている点である。つまり、労働していない状態は死を意味する

以上、労働は生の発露に他ならない。この点について、他にも例えば次のような一節を挙げることができる。

無為のまま動かなくなってしまうような存在はただの一つとしてない。事物だってそうだ。万物はつながっており、仕事に取りかかり、共通の作品のうちで自分の働きをなすように仕向けられている。働かぬ者はまさにそのことによって消え失せ、無用で邪魔なものとしてうち捨てられ、必要欠くべからざる労働者に場所を明け渡さなければならない。これこそが生の唯一の法則である […]」<sup>29</sup>。

ここでこのように語るのは今度はリュックその人である。ここでもやはり労働は「生の法則」と言われ、しかも人間のみならず生物一般、あるいは事物までもがこの「生の法則」に従うという宇宙論的視座において捉えられている。このような次元を併せもつゾラの労働概念について、アルノー・フランソワは以下のように述べている。「際立っているのが、 […]」以下の二つのことが同時にゾラに生起していることである。一つには、『パスカル博士』にいたる長い知的道のりによって準備されてきた生をめぐる宇宙論が決定的に採用されたことであり、もう一つが、同じ時期に同じ小説において労働の価値論が急激に形をなしたことである。あたかもゾラにとって、生の存在論的肯定と労働の価値論的肯定が分かちがたい相関項をなし、相互に条件付けあっているかのようである<sup>30</sup>」。フランソワがここでも述べるように、ゾラにおいては生物学的次元で捉えられた生はすでに『労働』以前の作品群に通底する主題として存在しているわけだが、これが『労働』において労働の主題と絡み合うことで、これに宇宙論的彩りが加わるということが起こるというわけである。

## 5. 『労働』における労働の変質

ジャック・ノワレに従えば、同様のことは労働のみならず『労働』で描写される電気にも起こっていると考えることができる。「[産業や社会をめぐる血の流れという電気メタファー]は電気を生の流体として表象する

が、これが巨大な生物と見なされた宇宙に生気を与えているのである。電気の崇拜は、ここでは宇宙の生成原理の崇拜と混同されているのであり、この新しい宗教は生 [la Vie] の宗教となる<sup>31</sup>。つまり『労働』においては、労働のみならず、社会変革のインパクトを持つ技術革新である電気さえもが、たんに幸福の約束としてだけでなく生物学的宇宙論の次元で捉えられていることになる。『労働』においてこれが頂点に達するのは、作品末尾で語られるリュックの死の場面である。自分が愛した女性たちに囲まれ、自ら完成に導いたボークレールを眺めやりながらリュックは事切れる。ここで『労働』の掉尾をなす一節を引用しておく。「作品は完成し、理想都市は打ち立てられた。リュックは息絶えた。そして宇宙的愛と永遠の生の奔流にうちに入ってしまった<sup>32</sup>」。

ある意味これはゾラの労働の理念の究極的な形であるだろう。しかし注意が必要なのは、このような労働の理念はある特権的な人物のみによって生きられるものではなく、ましては個人の問題に還元できるものでもない点である。上に引いたリュックの言葉に、「万物はつながっており、仕事に取りかかり、共通の作品のうちで自分の働きをなすように仕向けられている」とあるように、すべての人間（あるいは事物）において労働の理想が生きられなければならない。そのためにはもちろん労働体制自体が変革されなければならない。この点についてアルノー・フランソワは次のように述べている。「しかしながら、ゾラにとって、そもそも労働それ自体が社会における公平な再配分の対象になるべきものである。そして躊躇なく、このような要請の起源をゾラの最終的な哲学的前提にまで遡らせることができる。こう結論づけよう。もしも労働が生であるならば、まさしく誰もが生の——個人の生の——権利を有しているという意味において誰もが労働の権利を有しているのだ<sup>33</sup>」。ゾラの『労働』のボークレールにおける新しい労働体制については、テキスト中で必ずしも詳述されていないのだが、その実際がうかがい知れる一節を本稿の第1説においてすでに引用しておいた。また別の箇所ではやがて賃労働が廃止されることが示唆されているが、それでもユートピア都市の完成によって労働自体が廃止されているわけではない点には注意が必要である。1日4時間しか働く必要がなくても、あるいは賃労働が廃止されたとしても、ゾラのユートピア都市

において人は労働するのである。つまり、ゾラの『労働』における労働が目指す人類の幸福は労働によって、そして労働においてしか実現し得ないものなのだ。ゾラにおいては労働からの解放はあり得ない。ただ労働はその性質を変えるだけである。

これがゾラの『労働』における「労働のユートピア図式」であるとして、はたしてこれをどのように評価すればいいのだろうか？ 先ほども述べたとおり、『労働』においては社会システムや労働体制が体系的に記述されているわけではなく、この「労働のユートピア図式」の内実に具体的な検討を加えるのは必ずしも容易ではないように思われる。また雇用制度が廃止され労働者による自主管理が実現しているように見える一方で、ユートピア都市としてのボークレールはパターナリズム的な性格を色濃く残しているという矛盾も存在している。それはリュックが神格化されることに端的に見て取れるものだ<sup>34</sup>。したがってここでは『労働』における「労働のユートピア図式」を、メーダによる19世紀末の労働の把握と関連づけながら捉えておきたい。すでに見たとおり、メーダは19世紀において労働の位置づけを検討するために、労働表象の意味論的転回がどのように進化したのかを跡づけていく。しかし19世紀末になるとこのような意味論的転回はすでに定着しており、むしろ意味論的転回によってもたらされた新しい労働表象を参照点としていかにして現実の制度を再設計するかが問題となる。これを実践すべく期待を寄せられたのがもちろん社会民主主義であるが、当時の社会主義思想は労働をめぐる根本的な矛盾に未だうまく応えることができていなかった<sup>35</sup>。その矛盾とは以下のようなものである。

劣悪な労働条件と労働に伴って生じる価値増殖についての議論との矛盾、労働に対する憎悪と労働のみが公正な社会的ヒエラルキーを根拠づけられるという信念との矛盾、労働の解放という目標、それゆえ個人的・社会的生活に占める労働の位置を根本的に減少させるという目標と、聖変化 [transsubstantiation] の作用によって労働の解放を労働の内部で行うという意欲との矛盾——これらは未解決のままであった。<sup>36</sup>

ここでは三つの矛盾が挙げられているが、ここで注目したいのが3番目の矛盾である。すなわち、「労働の解放」と「その労働の解放を労働の内部で行うという意欲」との矛盾である。この一節にある聖変化とはもちろんキリスト教のミサにおいてパンと葡萄酒がキリストの体に変化することを指すことを踏まえれば、この矛盾は以下のように言い換えることが可能ではないだろうか。すなわち、理想的な労働表象を実体化することによって労働の内部によって労働から解放されるとすることは、はたして労働からの解放であるのか？ このような矛盾に対して『労働』のゾラであれば肯定的に答えることであろう。すでに見たように、ユートピアとして生まれ変わったボークレルにおいて、人々は必ずしも働く必要がなくとも働くのである。しかしそこではもはや労働の性質自体が変化しているのである。念のためもう一度その一節をここに引用しておこう。「人々は4時間しか働かず [travaillait]、市民は40歳で労働者としての恩義を社会に返し終わり、後は個人の楽しみのために働く [œuvrait] だけだった<sup>37</sup>」。ここでの「働く」という動詞の“travailler”から“œuvrer”へと変化は実に雄弁ではないだろうか。労働とはもはや作品 [œuvre] に関わるものなのであり、すでに見たように、それはゾラにおいては生の発露に関わる行動に他ならない。だとしたら、ゾラの『労働』はメーダが挙げる矛盾の一つには答えることができているのではないだろうか。人々は労働しながらも労働からの解放を遂げることができるのである。ゾラが『労働』において描き出すのはそのような労働のユートピアに他ならない。

もちろん人間の本質に労働 [œuvrer] を置くかどうかは議論の分かれるところであろう（冒頭でふれたベーシックインカム議論もある面ではこの問題に関わっている）。またこの“travailler”と“œuvrer”の区別は、ハンナ・アーレントによる人間の行いの三区分を想起させるものだ。よく知られるように、アーレントは『人間の条件』において人間の行いを、「労働 labor」「仕事 work」「活動 action」の三つに分類した<sup>38</sup>。このうち「労働」は人間の生物的生の維持に必要な労働であり、「仕事」は人間の世界において価値を持つような耐久性のある工作物の生産に関わるものである。『労働』では工業生産が問題になっている以上、この作品で描かれる労働は一貫して「仕事」であると考えられるかもしれないが、アーレントの

「仕事」概念が芸術作品をも含んでいることから分かるように、「仕事」は創造的側面を有しておりむしろ『労働』の後半に現れるユートピアで実現するような労働であると考えられるべきだろう<sup>39</sup>。その意味で、『労働』における労働の変質はアーレントのいう「労働」から「仕事」への移行であると考えうるかもしれない。その一方で、人間のあいだで交わされる言語を介した行いである「活動」はどうかであろうか。アーレントは政治をこの活動の領域に位置づけるわけだが、ユートピア都市としてのボークレールに政治は存在するのか？あるいは政治を超克しているという意味でもこれはひとつのユートピアなのであろうか？

---

註

- 1 Henri Mitterand, *Zola. III. L'honneur (1893-1902)*, Fayard, 2002, p. 715.
2. ここでいう『四福音書』の作品群とは、もちろん『豊穡』『労働』『真理』（未完の『正義』は除く）のことである（なお、『真理』は1990年代には livres de poche から刊行されていたようである）。本論では『労働』について、以下の全集版を典拠とする。Émile Zola, *Travail*, édition établie par Henri Mitterand, *Oeuvres complètes, tome 8*, Cercle du livre précieux, 1968.
3. もちろんこの時期のゾラを真剣に受け止めた読者もいたであろう。例えば、都市計画家のトニー・ガルニエは彼の『工業都市』（1918）プランを構想するにあたって『労働』を読んだ可能性がある。また1979年、ブザンソンを拠点とする時計メーカーであるLIP社の工具たちは、自分たちの労働運動の延長でゾラの『労働』を再刊し序文を寄せている。これらの点については、すでに以下の論文で取り上げた。彦江智弘「〈言葉の受肉〉としての引用——ゾラとトニー・ガルニエのユートピア」、篠田勝英ほか（編）『引用の文学史——フランス中世から20世紀文学におけるリライトの歴史』水声社、2019.
4. Henri Mitterand, « La révolte et l'utopie : de *Germinal* à *Travail* », *Le Discours du roman*, PUF, 1986, p. 160-161.
5. この点について、ミットランは1986年の『ゾラと自然主義』においては、『ルーゴン=マッカール叢書』において人間の内に潜む獣性や社会の奥底に蠢く病や死を抉出してきたが故に救済や和解が実現する楽園が求められることになったという説明を加えている。Henri Mitterand, *Zola et le naturalisme*, PUF, coll. « Que sais-je ? », 1896, p. 94-96.
6. Mitterand, « La révolte et l'utopie », *op.cit.*, p. 161.
7. *Ibid.*, p.160.
8. 井上智洋『人工知能と経済の未来 2030年雇用大崩壊』文春新書、2016、p. 232.
9. Zola, *Travail*, *op.cit.*, p. 917.
10. Voir *ibid.*, p. 953.

11. *Ibid.*, p.944.
12. この点については以下を参照のこと。Jacques Noiray, *Le Romancier et la machine. L'image de la machine dans le roman français (1850-1900)*. I. L'Univers de Zola, José Corti, 1981, p. 487-488.
13. 『労働』における電気、とりわけ太陽熱発電については、例えば以下の論考がある。中村翠「ゾラと科学技術 『労働』(1901)を中心に」、真野倫平(編)『近代科学と芸術創造 19～20世紀のヨーロッパにおける科学と文学の関係』行路社、2015、p.425-444.
14. Henri Mitterand, Zola, *op.cit.*, p. 703-709.
15. Thierry Paquot, « Paris 1900. Le Palais de l'Électricité », *Les Cahiers de médiologie*, n° 10, février 2002, p. 201. なおパコは本論考の後半で、ゾラの『労働』を「電気小説」として取り上げている。
16. *Op.cit.*, p. 467.
17. *Ibid.*, p.215. このように第2次産業革命のインパクトを技術的次元のみならず社会的次元において肯定的に環流させようという態度はむろんゾラひとりのものではない。ノワレも指摘するように、同時代のユートピア的社会主義者やマルクスにおいても同様の技術への期待を見出すことが可能である (*ibid.*, p.216)。
18. ゾラにおける労働の問題を扱った論考に例えば以下のものがある。Adolfo Fernandez-Zoila, « Le travail dans les fictions littéraires d'Émile Zola », *Travailler*, n° 7, janvier 2007, p. 103-118 (この論考では主に『居酒屋』と『労働』が取り上げられている)。なお同じ著者に以下の論考がある。「Le travail dans les fictions littéraires », *ibid.*, p. 13-36(この論考は文学テクストにおける労働の主題を概観しているが、取り上げられる労働は工場労働や賃労働に限定されない第一次産業を含む労働一般であり、議論の胃口はむしろ広い)。
19. Dominique Méda, *Le Travail. Une valeur en voie de disparition?*, nouvelle édition, Flammarion, coll. « Champs essais », 1995, p. 39 (ドミニク・メダ『労働社会の終焉 経済学に挑む政治哲学』若森章孝・若森文子訳、法政大学出版局、2000、p.31)。
20. Dominique Méda et Patricia Vendramin, *Réinventer le travail*, PUF, 2013, p. 12-13.
21. Dominique Méda, *Le Travail, op.cit.*, p. 99 (p.87)。
22. *Ibid.*, p.103 (p.91)。
23. Dominique Méda et Patricia Vendramin, *Réinventer le travail, op.cit.*, 20. 他にも例えば今村仁司の以下の論考でも、19世紀のフランスにおいて労働が人間存在の本質をなすという言説が氾濫することが取り上げられている。今村仁司『近代の労働観』岩波新書、1998、p.57-61.
24. Dominique Méda, *Le Travail, op.cit.*, p.125 (p.111)。
25. Zola, *Travail, op.cit.*, p.661.
26. このようなエンジニア=テクノクラート像の萌芽は『パリ』のギヨーム・フロマンに見出すことができる。
27. このように労働の意味論的転回が技術の問題と不可分の関係におかれていることを踏まえるなら、『労働』のゾラとサン=シモンは親和性があるのではないだろうか。『労働』のテクスト中にサン=シモンの名前は現れこそすれ、知られているように、重視されるのはむしろフーリエである。また実証的なレベルでは、「第三のゾラ」においてサン=シモンが参照されたのは主に『パリ』執筆時である(この点については、以下を参照のこと。Fabian Scharf, *Émile Zola : De l'utopisme à l'utopie (1989-1903)*, Honoré Champion, 2011, p. 347-350)。なお、メダによれば、フーリエも19世紀的な「労働の賛美」というイデオロギーを決して免れてはいない(Dominique Méda,

*Le Travail, op.cit.*, p.126-127 (p.113))。

28. Zola, *Travail, op.cit.*, p.590.
29. *Ibid.*, p.669.
30. Arnaud François, *La Philosophie de Zola. « Faire de la vie »*, Hermann, 2017, p. 273.
31. Jacques Noiray, *op.cit.*, p.490.
32. Zola, *Travail, op.cit.*, p.969.
33. Arnaud François, *op.cit.*, p.303 (傍点原文)。
34. この点については、例えば以下を参照のこと。Henri Mitterand, « La révolte et l'utopie », *op.cit.*, p. 159-160.
35. ジャン・ジョレスは「ラ・ブチット・レビュブリック」紙に寄せた書評において、『労働』を評価しつつも、ユートピア建設が改良主義的にとどまっている点に留保を付けている (Henri Mitterand, « Notice », in Zola, *Travail, op.cit.*, p.984)。
36. Dominique Méda, *Le Travail, op.cit.*, p.140-141 (p.125. 一部訳文を改編して引用した)。
37. Zola, *Travail, op.cit.*, p. 917.
38. ハンナ・アレント『人間の条件』清水速雄訳、ちくま学芸文庫、1994、p.19-21. なおメーダの労働観はアレントの影響を受けており、メーダは「労働」のみならず「仕事」含めた労働からの解放を唱えている。なおメーダについては例えば次の論考がある。宇野重規「労働と格差の政治哲学」『政治哲学的考察』岩波書店、2016、p.263-292.
39. この点についてアルノー・フランソワは、『労働』における労働がつまるところ「創造性の、自己開花の、対象における自己の実現の経験」(Arnaud François, *op.cit.*, p.341) であるとしながらも、これが大多数の経験とはならず、リュックを初めとする一部の知的階級に占有されていることを指摘している。

(都市イノベーション研究院・教授)

# L'utopie de la libération du travail dans *Travail* d'Émile Zola

Tomohiro HIKOE

Malgré la place marginale dans la bibliographie de Zola, *Travail* (1901) paraît avoir une certaine actualité. En effet, en ce moment du XXI<sup>e</sup> siècle où l'on est en train de vivre un grand changement social provoqué par l'apparition d'une technologie comme l'intelligence artificielle, il est intéressant de lire ce roman du « troisième Zola », qui raconte la construction d'une ville utopique sur le fond de l'invention de l'électricité; d'une certaine manière, le rêve de la Seconde Révolution industrielle imaginé par Zola se superposerait sur notre Quatrième Révolution industrielle, au sujet de laquelle on ne sait pas encore si celle-ci sera une salut ou un cauchemar...

Dans cet article, on aborde la question du travail dans *Travail*, voire la libération du travail. Car, comme son titre l'indique, ce roman fait apparaître une utopie où il s'agit de surmonter l'état actuel du travail au moyen du changement social rendu possible par l'invention technologique. Pour interpréter cette utopie zolienne, on se réfère surtout aux études de Dominique Méda (entre autres *Le Travail. Une valeur en voie de disparition ?*). Selon celle-ci, l'idée du travail du XIX<sup>e</sup> siècle se constitue en trois moments : la glorification du travail, la critique du travail réel et la mise en place du schème utopique.

Au premier abord, *Travail* est structuré précisément de ces trois moments. Or, chez Zola, le travail est aussi saisi dans une cosmologie particulière de la vie. Et c'est cette cosmologie qui donne, nous semble-t-il, une tournure particulière à l'idée du travail zolienne ; il en résulte cette contradiction: la libération du travail se fait à travers et dans le travail même dans *Travail* de Zola.